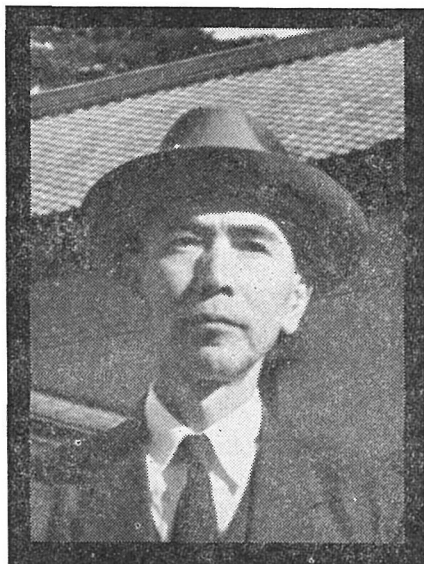


中島万次郎先生を偲ぶ



略 歴

- | | |
|--------|------------------------|
| 明治二十三年 | 七月二十九日、大阪市北区淡路町一丁目に生まる |
| 明治三十六年 | 四月、大阪府天王寺中学校に入学 |
| 明治四十五年 | 七月、第三高等学校第一部乙類卒業 |
| 大正 一年 | 九月、京都帝国大学政治経済科入学 |
| 大正 四年 | 七月、同大学政治経済科退学 |
| 大正十三年 | 四月、京都帝国大学文学部哲学科入学 |
| 昭和 二年 | 三月、同大学文学部哲学科卒業 |
| 昭和 二年 | 四月、大谷大学予科教授に就任 |
| 昭和二十四年 | 四月、大谷大学教授に就任 |
| 昭和三十二年 | 十月、同大学永年勤続表彰を受ける |
| 昭和三十九年 | 三月、依願退職 |
| 昭和四十一年 | 四月、同大学客員教授の委嘱を受ける |
| 昭和四十四年 | 三月、同大学客員教授の委嘱を解かれる |
| 昭和四十六年 | 四月、同大学非常勤講師に就任 |
| 昭和四十六年 | 三月、同大学非常勤講師を退く |
| | 四月十六日、大谷大学名誉教授の称号を受ける |
| | 四月十九日、逝去 |

中島万次郎先生を偲ぶ

本学名誉教授 外村 完 二

中島先生がなくなられたと聞いて、早速弔問にでかけたが、既に先生の御遺骸は納棺されていて、最後の御対面の機を逸したが、およそ四十有余年お顔を合わせていたあの温顔は、いまだに臉に残って去りません。いつもおだやかな表情を崩されたことのないあの端正な御顔、御顔だけでなく、あの飄々としたしなやかな長身も印象的でした。話をされると、淡々と、それでいて、力強く、鋭く要点をつかんだ御口調も、忘れがたい。教室に入られても、この態度は変わりなく、過日催された昭和二十一年度の卒業生の追悼会の席上でも、そういう先生の教室での端正な態度が、口々に語られていた。ただし一度だけ、色をなして怒られたことがあったという話で、表面は穏かだが、内心には意外にはげしさを藏せられた先生の御性格を知っているぼくには、そういうこともあったろうとうなずかれた。先生には、何ごとにも動かぬはっきりした正義観があつて、それに基いて主張されるときには、ひとしおきびしさが感じられた。教授会では誰も、この先生の公正な御発言に耳をかたむけたものである。私事にわたって申訳ないが、ぼくが、「ヘルマン・ヘッセ」という著書を贈呈したとき、鋭く数言でその欠点を指摘していただいたことがある。平生の温和な態度とはまるで異つたこのきびしい鋭さに、ぼくは大いに驚

いたが、それ以来、一そう先生へ敬意を寄せることになった。こゝとわつておくが、先生のきびしさは、単に外的に向けられたものでなく、己れに対しても同じであつたと思うべきで、あの淡々とした先生の生活態度も、実はその結果であつたと、ぼくは受取っている。

先生には、正直なところ、これといった著書も、論文も見当らない。たしか一度だけ、学校の月例講演で、御専門の美術史に対する研究の一端を話されたことがあつたが、残念ながら、その題名を忘れてしまつて、ここにあげることができない。この学的業績が少なかったことは、決して先生が学的研究をおろそかにされたことを意味するものでなく、つねに研究にいそしみながら、実は、前にあげた己れへのきびしさから、その発表を禁じていられたことを物語っているのである。トルストイは、芸術にはパニティが必要だといっているが学問にも同じことがいえそうである。

先生にはこの己れを誇示するパニティがなかった、いや、それを自らきびしく押えられていたと解すべきだろう。現に、ぼくが度々御一緒に古美術研究の旅で、先生が、古美術に発しられた言葉は、批評的な鋭さがひらめいていたし、また学生を引率して出かけられた古美術行脚の臨時講演では、縷々として作品の美的価値を解説せられたものである。上述のクラスの学生も、その印象を今でも生き生きと物語っていた。

先生は、明治二十三年七月二十九日、大阪市北区淡路町一丁目、生を享けられ、四十一年三月、大阪府立天王寺中学校を卒業、四十五年第三高等学校を卒業された。このころは、生家が裕

福であったので氣ままに自分の好む路を歩まれたらしく、すぐに大学は中退された。あとから考えると、不思議なことのように思われるのだが、先生にも、若さのヒブリスがあったとみえて、小説家志望のいわゆる文学青年の路を歩まれたのである。御令息の暢太郎京大教授の御話では、そのころ書かれた小説を読まれたことがあるそうだが、この間のことは固く黙して語られなかったたので、その小説はもちろん、その御生活振りさえ、詳しくはぼくは知らなかった。

ただ大庭先生の御話で、三高で同級だった浜村という御方と、大庭先生もともども、東京で、つねに行動をとみにしていられたことをうすうす聞き知っていて、この三人のグループに、当時まだ若い倉田百三氏が加っていたことも洩れうけたまわっていた。ちなみに、この浜村氏と先生とは、大庭先生の妹にあたるかたと結婚されたので、この三人組は義兄弟になる。

ここでまた私事を申上げて恐縮だが、ぼくは、実はこのころの先生と一度おあいしている。大正七年ごろだったか、京都で、倉田氏の「出家とその弟子」が公演されることになった。親鸞は青山杉作、唯円は村田実という新劇俳優が扮したが、ぼくも、当時「出家とその弟子」のブームに酔っていたひとりだったので、友人が村田の知人だった関係で、公会堂での舞台稽古を見に行くことができた。まだ三高の学生だったので、暗い客席で小さくなくて見ていると、扉をあけてドヤドヤと数人の人がはいってきた。そのうちのひとり、堂々とした巨漢で、ぼくたちをヘイゲイして、通りすぎていった。これが、大庭先生で、そのあとに中島先

生がいられた。もちろん当時は、名前をしらず、ことに薄暗い光のなかだったので、ただおぼろに輪郭だけしか見えなかったのだが、作者の倉田百三氏の関係の人たちだと聞いているので、ぼくたちは、余計小さくなって、畏怖に近い気持ちで見上げていた。これが、ぼくと中島先生との最初の出合いだった。もちろん、あとから大庭先生に聞いて、初めて知ったわけであるが、不思議な因縁という感じが、深く心にしみた。

東京での先生の御生活も、関東大震災でピリオッドがうたれ、先生は、改めて大正十三年から京都帝国大学文学部哲学科へ御入学になった。この間の先生の心境の変化については、これまた黙して語れないので付度の範囲を出でぬが、御実家の経済的破綻で、いままでの御自由な生活がゆるぎなくなり、同時に文学志望の夢も消え、再び大学に入って、学問を身につけたい希望が新しく目覚めてきたからと想像されます。大学ではもちろん美学専攻でした。昭和二年三月御卒業となり、すぐに本学に入って予科教授に御就任、ドイツ語の教授にあたられました。当時のドイツ語の教授は、予科ドイツ語専攻のクラスのクラス担任になり、しかも同一学級を卒業まで三年間続けてやることにきまっていました。それから、学生との交渉も今よりはずっと親しく、先生の薫陶を受けて、いまなお御温容を偲んでいる同窓生もさぞ多いことでしょう。なお、大谷大学が、新制大学に改組された昭和二十四年四月一日から、大谷大学教授となられ、専門課程の授業も御担当になりました。

あまりひとの御存知ない東京でのボヘミアン生活を、申し上げ

たのはいささか故人の御心に背くことかも知れないと、内心忸怩たるものがあるのですが、ぼくとしては、あの穏かなと思われる御生涯のうちに、そういった年少気鋭のシュトゥルム・ウント・ドラング時期があったことを知っていただきたいという気持があり、敢えて記したわけです。恐らく後年のいささか禁欲的と申上げたい御生活は、この疾風怒濤時代の超克だったのでしょうか、前に申し上げた己れへのきびしさに、どんな精神的苦悩の末到達されたかは、ただ想像するだけで、よくはわかりません。しかし、あの整った御生活を知っているぼくには、何か深い人生の英知を感じさせられたものです。

昭和三十九年三月卅一日に定年退職され、四月一日から客員教授として実質的には前と変らぬ御勤務でした。四十一年三月には規定によって客員教授を退職され、四月一日に改めて非常勤講師

になられ、以前とは少い授業でしたが相不変大学で教鞭をとっておられました。しかしこのころから胃を病まれ、四十四年に御精養のため退職されました。最後の授業のあと、ささやかなお別れティーパーティが催されましたが、ぼくは当日登校しないので列席できず、あとで書いて甚だ残念に思いました。とにかく、昭和二年から四十四年まで、あしかけ四十三年も、大谷大学にずっと在職されて、学生の訓育にあたられたのですから、御死去の悲報をきいて、ひとしお哀惜の情にかられた方々も、多いことでしょう。御死去の日は、昭和四十六年四月十九日でした。御令息のお話では、前日床を離れて窓外を眺められたとか、きつとおだやかな御臨終だったのでしよう。なお四月十六日附で、大谷大学名誉教授の称号をお受けになりました。御戒名は清風院积万法。謹んで御冥福を御いのり致して、この拙文を結びます。